

第40回 歴史リレー講座「邪馬台国・初期ヤマト王権と大和川」 白石 太一郎氏（H30.1.21）

本日は、3世紀前半に成立した邪馬台国およびそれに続くヤマト王権について、そして両者の成立過程には大和川が関わっていたことをお話しします。邪馬台国の所在地問題は江戸時代から議論が続いているが、現在では畿内大和説が圧倒的に優勢です。そもそも、畿内説あるいは九州説にしろ、『魏志倭人伝』だけを拠り所としていては方位や距離との整合性に問題が生じます。そこに最新の考古学的研究成果を総合した結果、畿内大和説にほとんど疑いの余地がなくなりました。問題はそれから先で、どのような経緯で邪馬台国連合（約29か国の中古連合）の段階から初期ヤマト王権成立に至ったのかです。これを解決して初めて以降の歴史と繋がります。

畿内大和説の主な根拠は出現期古墳の分布図を見れば一目瞭然です。大規模な古墳は圧倒的に畿内大和に集中しており、九州にはごくわずかしか存在しません。また、近年の研究から桜井市の箸墓古墳など大型前方後円墳の出現は邪馬台国の卑弥呼の没年と同じ3世紀半ばであることが知られるようになりました。

とはいっても、朝鮮半島から稻作が伝わった弥生時代における文化最先進地域は北部九州（玄海灘周辺）でした。なぜ畿内がこの北部九州を抑え日本の中に取って替わったのか。一部の研究者が唱える東遷説は根拠が弱く、その証拠にこの時期の北部九州の土器は畿内でほとんど出土していません。この問題は鉄資源の問題と密接に関係しています。日本で鉄生産が始まるのは6世紀。それまでは北部九州の勢力が朝鮮半島の鉄資源を輸入し、瀬戸内海沿岸や畿内の首長たちは高価な代償を払ってこれらの資源を手に入れていました。しかし、より安定的な鉄資源の確保を願うならその輸入ルートの支配権を握る必要があります。そのため畿内や瀬戸内海沿岸の首長たちが政治連合を結成し、ついに北部九州との争いに発展。その結果、畿内・瀬戸内連合が北部九州を制圧し邪馬台国連合誕生に至ったというのが私の仮説です。

この邪馬台国連合はその後どのような経過でヤマト政権へと変貌を遂げたのでしょうか。当時、畿内では前方後円形墳丘墓（前方後円墳の前身）が盛んに造られました。一方、濃尾平野以東の東日本にも同じような政治連合が存在したと考えられ、多数の前方後方形墳丘墓（前方後方墳の前身）が見つかっています。『魏志倭人伝』によると、247年に邪馬台国はかねてから不仲だった狗奴國くぬと戦争をしています。ただし、同書にある狗奴國の位置を示す「南」は「東」に読み替える必要があります。当時、中国人の倭國に関する地理観は正確ではなく、九州の南に本州が存在したと誤解していたためです。すなわち狗奴國は濃尾平野あたりにあったと考えられます。

このように、3世紀前半の日本列島には西の邪馬台国連合、東の狗奴國連合という二つの広域政治連合が成立していました。当初、狗奴國連合は邪馬台国連合を通じて朝鮮半島の鉄資源などを手に入れていたのでしょうか、その後戦いに発展。邪馬台国連合が勝利を收め、濃尾平野以東の諸国も含めたより広域の政治連合（いわゆる初期ヤマト政権）が誕生しました。以上のことから、邪馬台国連合がそのまますんなりヤマト政権に移行したというわけではないと言えます。

私は、古墳時代の政治連合の全体を「ヤマト政権」、その中枢をなした畿内の主権を「ヤマト王権」というように言葉を使っています。狭義の「ヤマト」、すなわち本来の「ヤマト」とは、奈良盆地の東南部（現在の天理市、桜井市あたり）を指します。すでにお話しした通り、初期ヤマト王権の王墓の中で最古の古墳が3世紀半ばに造られた箸墓古墳です。被葬者はかつての邪馬台国連合の盟主であり、新しく成立したヤマト政権の初代の王となった卑弥呼以外には考えられません。

初期ヤマト王権の地域的基盤を考えるとき、大和川の存在を忘れてはなりません。巨大前方後円墳群の分布図を見れば、淀川水系よりも畿内南部（大和、河内）を流れる大和川水系周辺に目立つことが多いからです。ヤマト王権の神祭りが行われた有力な神社も大和と河内に集中している事実からも、邪馬台国連合そして初期ヤマト政権は大和川水系を中心に形成されていたと考えて間違いないでしょう。

邪馬台国・初期ヤマト王権と大和川

白石 太一郎

最近の考古学的研究の進展の結果、奈良県桜井市箸墓古墳に代表される大型前方後円墳の出現年代が3世紀中葉に遡ると考えられるようになり、3世紀中葉まで存在した邪馬台国の所在地については、畿内の「大和」と考える研究者が多くなった。邪馬台国の所在地問題が解決に近づくと、次の大きな課題は、30ヶ国ほどの小国が連合していた邪馬台国連合の段階から、どのようにして初期ヤマト政権が成立したのかという問題である。

邪馬台国連合がそのまま初期ヤマト政権へと繋がったとする研究者もいるが、邪馬台国連合の段階と初期ヤマト政権の段階とでは、その版図も政治システムにも大きな差異があったと考えざるをえない。ここでは、邪馬台国連合がどのようにして初期ヤマト政権に転換したのか。また邪馬台国連合の盟主である邪馬台国や初期ヤマト政権と呼ばれる首長連合の中核をなした初期ヤマト王権の地域的基盤がいずれの地域であったのかを皆さんとともに考えてみたい。

1. 古墳の成立と邪馬台国

まずこの問題の前提となる、なぜ邪馬台国の所在地が畿内の「大和」を中心とする地域と考えられるのかについて簡単に説明しておこう。邪馬台国の所在地問題は、『魏志』倭人伝にみられる邪馬台国の所在をめぐる問題であり、あくまでも文献史学上の問題である。ただそれとは別に、大型前方後円墳の出現年代に関する研究が考古学の分野で著しく進展した。特に出現期の古墳に数多く副葬されている三角縁神獣鏡の年代研究が進み、諸説ある製作地の問題はともかく、その型式編年や制作年代が明確になった。

その結果、出現期の古墳の中でも古い段階の古墳は、三角縁神獣鏡としては最古段階ないしそれに続く時期のものしか含んでいないことが明らかになり、古墳の出現は3世紀中葉に遡ると考えざるをえなくなってきた。この出現期古墳は畿内を中心に西は北部九州にまで分布していることは確実であり、この段階には畿内の「大和」を中心に初期ヤマト政権と呼ばれる広域の首長連合が形成されていたことは疑いがない。それが卑弥呼の没年に続く3世紀中葉に遡ることから、邪馬台国九州説が成立し難いと考えられるのである。

2. 広域の政治連合形成の契機

これまた日本列島の古代王権の問題を考える上に重要な問題であるのでふれておきたい。弥生時代後期以降、倭国は本格的な鉄器の時代になる。この時期倭国では鉄生産は行われておらず、朝鮮半島南部の弁辰の鉄資源が輸入された。この鉄の入手ルートを支配していたのは玄界灘沿岸地域であり、独自の輸入ルートを持たない瀬戸内沿岸から畿内地域が、鉄を安定的に確保しようと、玄界灘沿岸地域からその入手ルートの支配権を奪取するほかなかったと思われる。

中国鏡の分布の中心が北部九州から畿内に転換するのが3世紀初頭であることからも、この時期を境に畿内・瀬戸内連合が鉄資源など先進文物の輸入ルートの支配権を握ることになったのだろう。これを契機に広域の政治連合が形成されるのである。最近、この考え方には批判も少なくない。ただ、なぜ先進的な北部九州に代わって後進的な畿内を中心に広域の政治連合が形成されたのかについて、納得できる説明はまだなされていない。古い東遷説が成立し難いことはいうまでもない。列島の初期の政治連合が、海外の先進文物の安定的入手のための組織にほかならなかつたことは、古墳時代中・後期の5・6世紀になっても変わりなかつたのではなかろうか。

3. 邪馬台国連合から初期ヤマト政権へ

3世紀前半の邪馬台国時代、日本列島の中央部にはもう一つの広域政治連合が成立していたことは疑いなかろう。『魏志』倭人伝は、卑弥呼の晩年、邪馬台国が狗奴国と戦つたことを伝えている。狗奴国は邪馬台国連合のさらに南にあったとされるが、邪馬台国畿内説を探ると、この南

は東と読み替えるほかない。畿内以東の地域で邪馬台国ないし邪馬台国連合と対等に戦えるような地域は、状況証拠からは濃尾平野をおいて他にない。

邪馬台国の中核部と想定される奈良盆地東南部などではこの時期、纏向石塚墳丘墓、ホケノ山墳丘墓など後の前方後円墳の祖形となる短い前方部の付いた前方後円形墳丘墓が盛んに営まれていた。それに対し、濃尾平野やさらに東の北陸、中部高地、東海東部から関東地方などには大規模な前方後方形墳丘墓が盛んに営まれていた。私はこの前方後方形墳丘墓が営まれていた地域こそ、濃尾平野の狗奴国を中心とする狗奴国連合に加わっていた地域であろうと考えている。この地域の諸勢力も、鉄資源の入手のため狗奴国連合を形成し、おそらく西方の邪馬台国連合を介して鉄などを手に入れていたのである。

ところが卑弥呼の晩年の正始7年(247)、両者は戦う。結果は『魏志』には書かれていらないが、その後の歴史の流れからも邪馬台国連合側の勝利ないしその主導による和平に至ったことは誤りなかろう。こうして西の邪馬台国連合と東の狗奴国連合が合体し、日本列島の中央部に初めて一つの大きな政治的まとまりが出来るのである。私は、この新しい広域連合を「初期ヤマト政権」と捉えている。さらにそれまで両連合に加わっていなかった地域も競つてこの新しい連合に参加したことはいうまでもなかろう。そうしなければ鉄資源などの入手が出来ないからである。

弥生時代は、列島に初めて水田稲作農耕が伝えられ、生産経済が始まった時代である。各地にクニが生まれ、それらの政治的統合が進展した時代にほかならない。西の邪馬台国連合と東の狗奴国連合が対峙した時代は、弥生時代の政治的統合進展の最終段階と捉えられよう。

4. 王墓からみた初期ヤマト王権

奈良盆地の東南部には、3世紀中葉から約一世紀間に営まれた6基の大型前方後円墳がある。北から天理市大和古墳群の西殿塚(墳丘長240メートル)、同柳本古墳群の行燈山(現崇神陵、240メートル)、と渋谷向山(現景行陵、310メートル)、桜井市箸中古墳群の箸墓(280メートル)、同鳥見山古墳群の外山茶臼山(200メートル)とメスリ山(240メートル)の各古墳である。それらはおそらく箸墓→西殿塚→外山茶臼山→メスリ山→行燈山→渋谷向山の順に造営されたもので、それぞれの時期の列島各地の古墳の中では隔絶した規模を持つことから、この時期の倭国王墓であることは疑いなかろう。

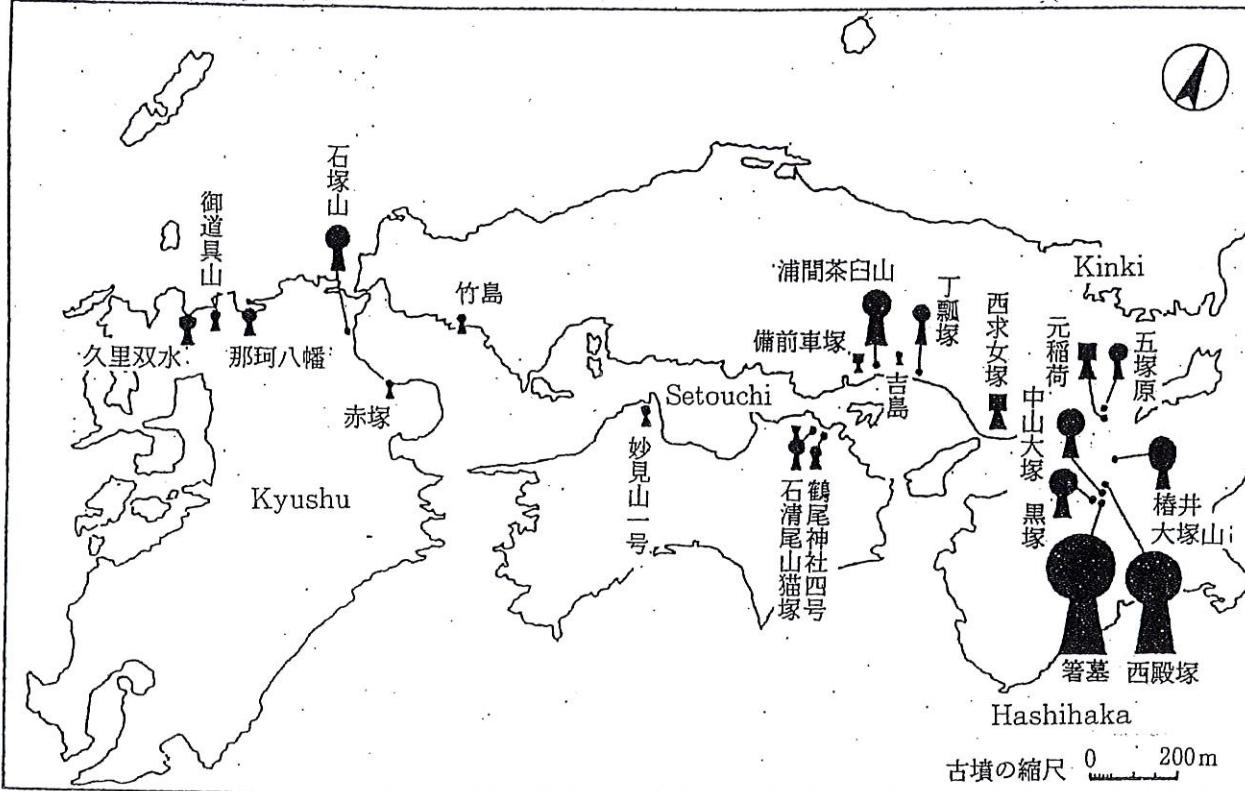
このうち最初の箸墓古墳は、定型化した大型前方後円墳、すなわち「古墳」としては最古のもので、その年代が3世紀中葉過ぎと想定されることから、『魏志』倭人伝にみられる卑弥呼の墓である蓋然性が大きい。彼女は邪馬台国連合の盟主であったが、新しく成立した汎列島的な首長連合である初期ヤマト政権の盟主にもなったものと考えるほかない。そしてこの6代の初期倭国王墓のうち5・6代目の行燈山、渋谷向山が、記紀の初期天皇系譜の崇神と景行の「山辺道上陵」と考えられることから、この6代の王がその後の天皇の系譜に繋がる初期の倭国王であることは疑いなかろう。ただしその王位の継承は、記紀の描く男系世襲制などとは程遠く、奈良盆地東南部、すなわち“やまと”的有力な政治集団から交互に選ばれたらしい。

5. 邪馬台国・初期ヤマト王権と大和川

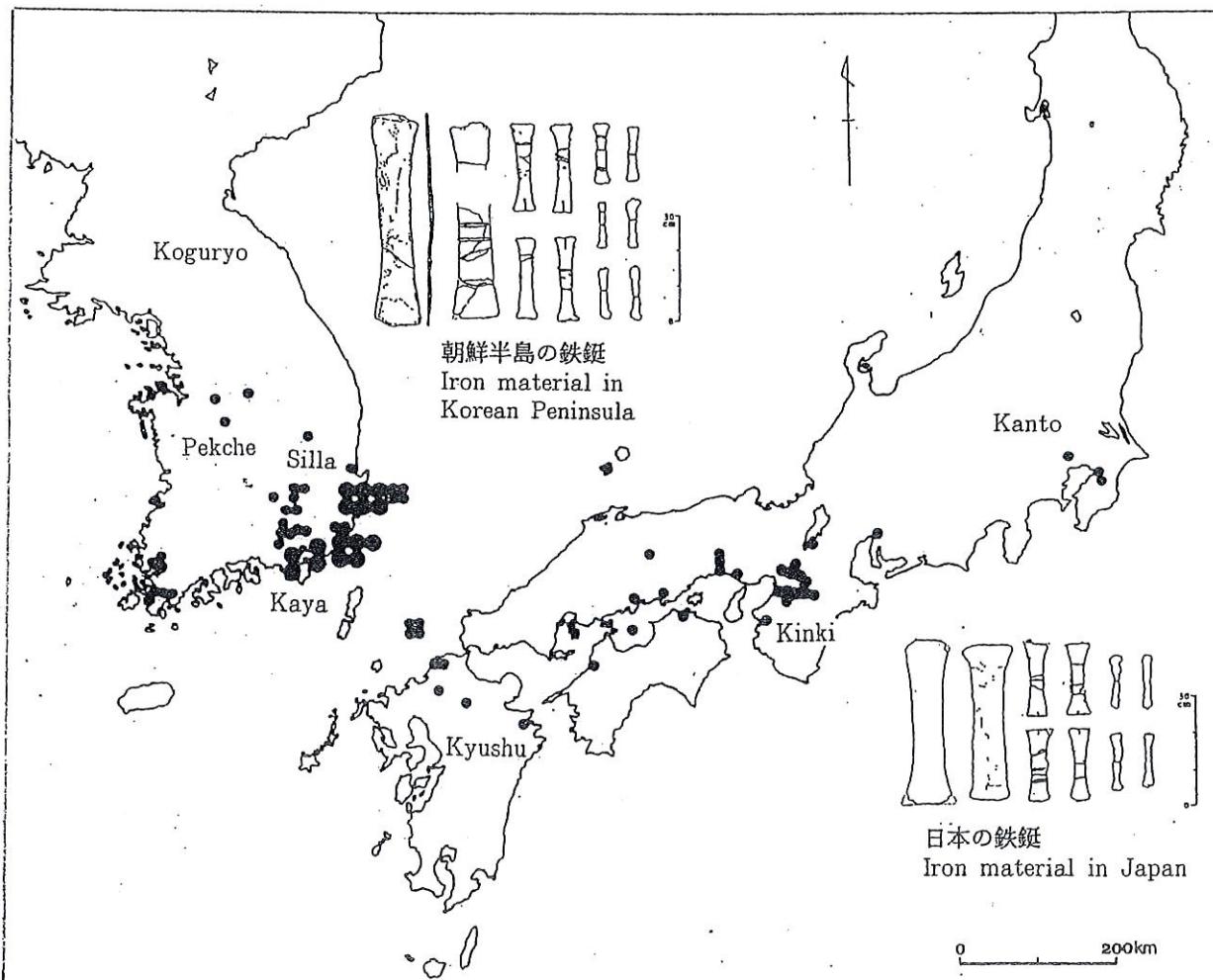
最近の考古学の調査・研究成果を総合して考えられる邪馬台国連合の成立から初期ヤマト政権への展開過程は以上のように捉えられよう。それではこの邪馬台国連合の盟主邪馬台国、さらにそれに続く初期ヤマト政権の中核をなしたヤマト王権の地域的基盤はいずれの地域であったのだろうか。ヤマト王権の大王たちが営んだ3世紀中葉～6世紀後半の巨大な前方後円墳の分布をみると、それは畿内全域ではなく、その南の大和川水系の大和、北河内を除く河内、和泉が中心で、畿内でも北の淀川水系の摂津、山背、北河内にはほとんどみられない。このことから、邪馬台国やヤマト王権の地域的基盤が畿内でも南の大和川水系であったことは疑いなかろう。

このことは文献による古代史研究者の直木孝次郎氏が早くから大和政権の地域的基盤が大和、河内(和泉を含む)であったことを主張しておられたことと明らかに符合する。北の淀川水系が畿内王権を支える地域に加わるのは、摂津や山背の勢力が、近江・尾張・越前など畿内東辺の諸勢力とともに繼体大王を擁立した6世紀前半の繼体朝以降のことであろう。邪馬台国・初期ヤマト王権は大和川が生み出したものにほかならないのである。

① 古墳の成立と邪馬台国問題

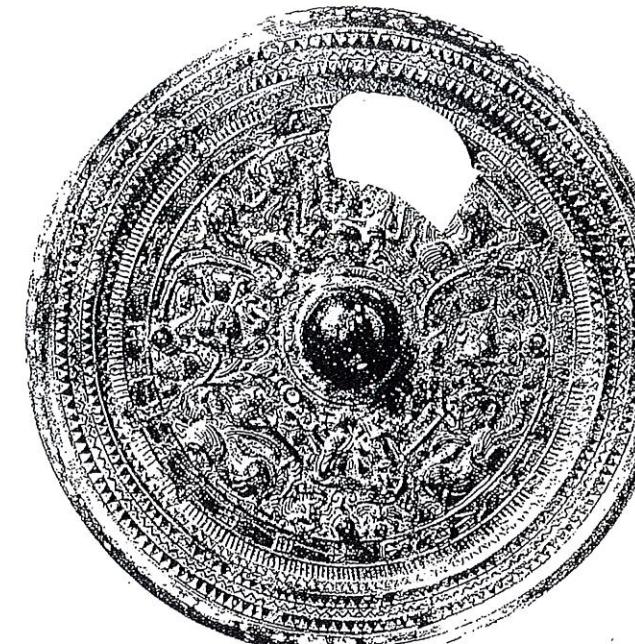


西日本における出現期古墳の分布

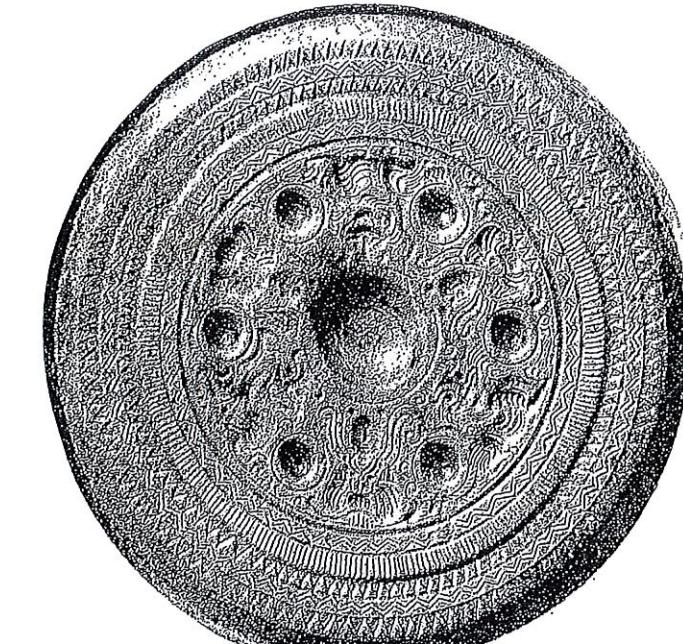


鉄鋌出土遺跡の分布 (●大は 10 遺跡、小は 1 遺跡を示す、東潮氏による)

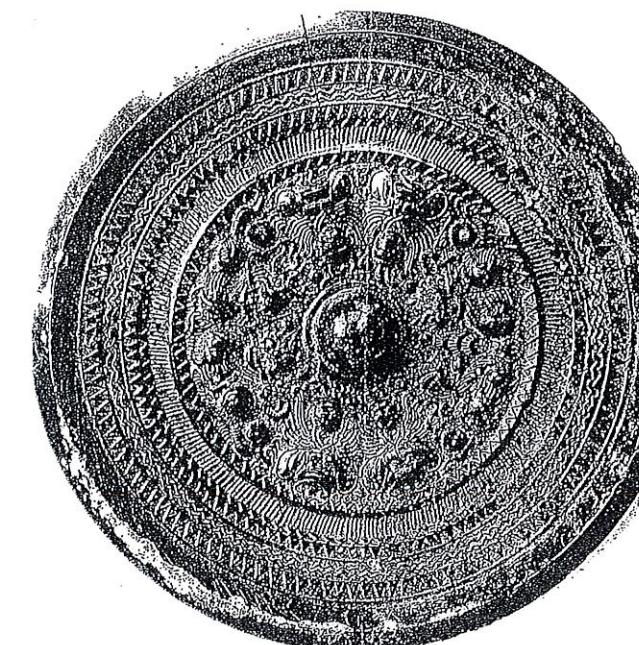
三角縁神獸鏡の編年



第1段階 正始元年銘同向式神獸鏡(群馬県柴崎古墳)



第4段階 波文帶三神三獸鏡(大分県亀ノ甲古墳)



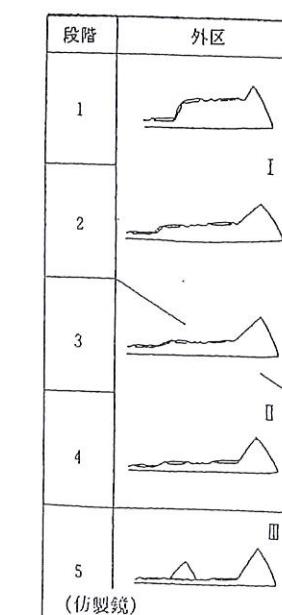
第2段階 櫛齒文帶四神四獸鏡(京都府椿井大塚山古墳)



第5段階 獣文帶三神三獸鏡(佐賀県谷口古墳)

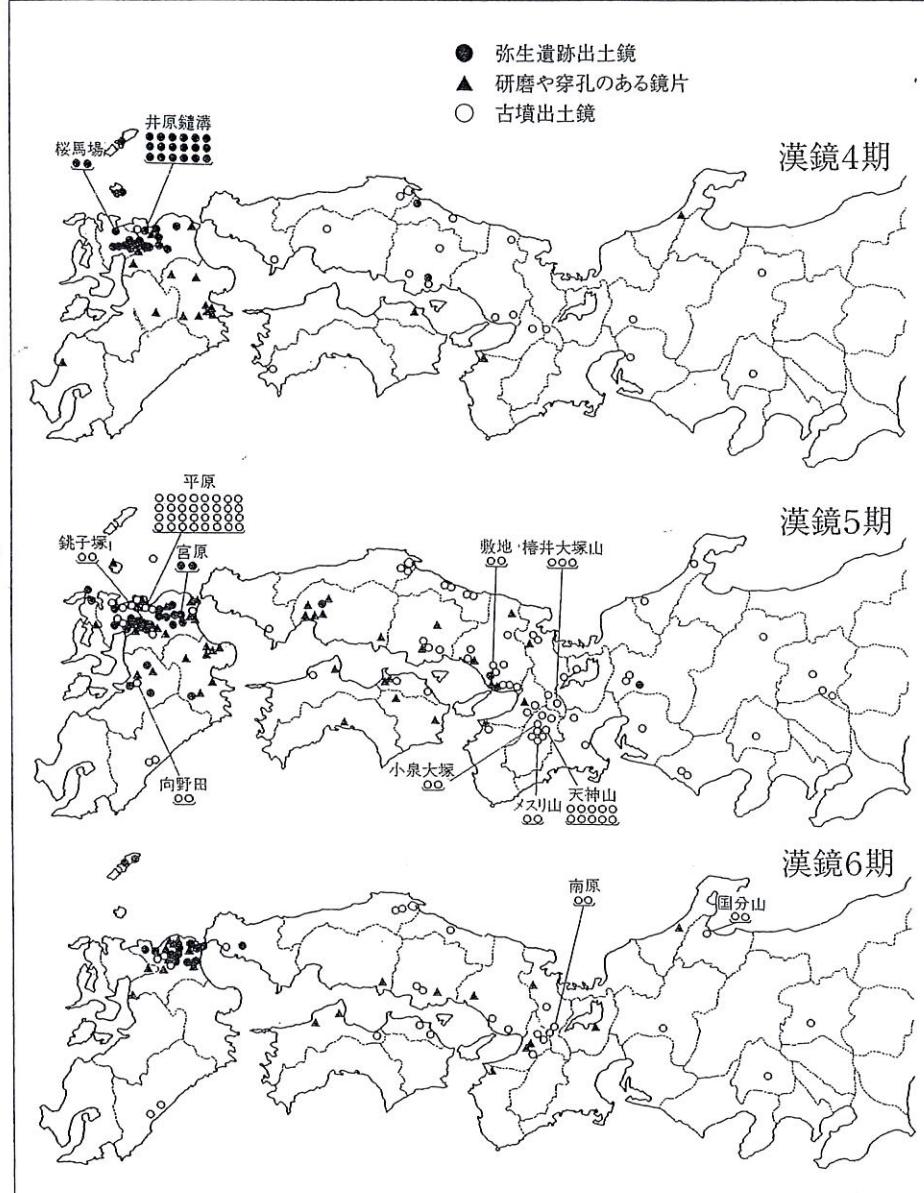


第3段階 獣文帶四神四獸鏡(京都府椿井大塚山古墳)

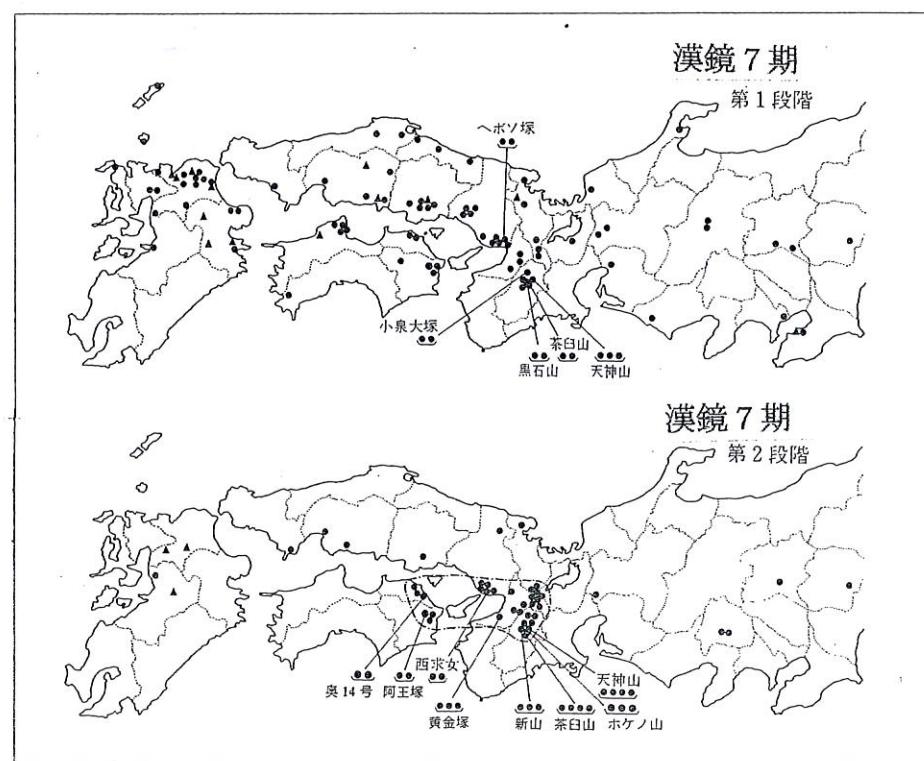


三角縁神獸鏡の断面形の変遷

② 広域の政治連合成立の契機



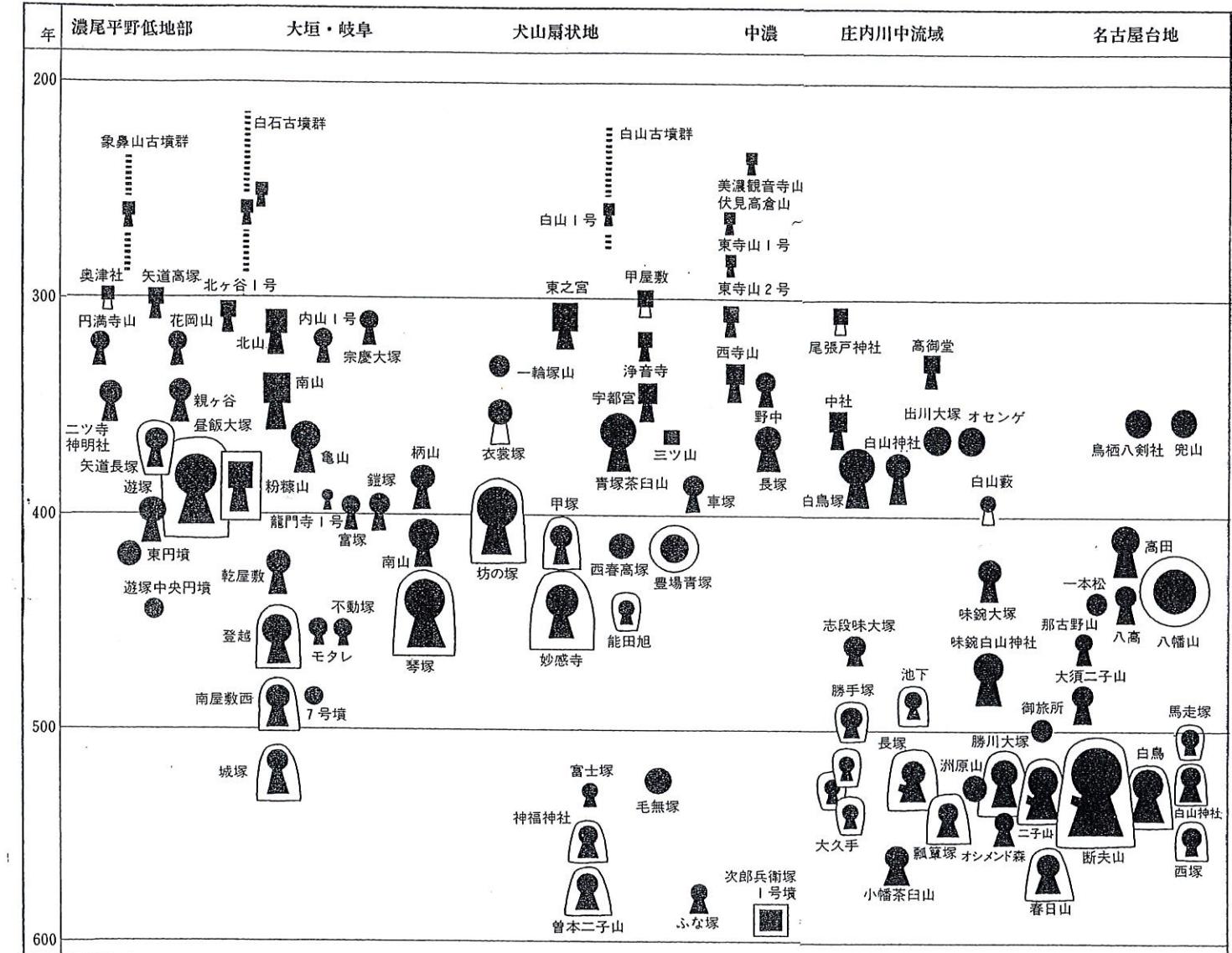
《中国鏡の分布の変化》



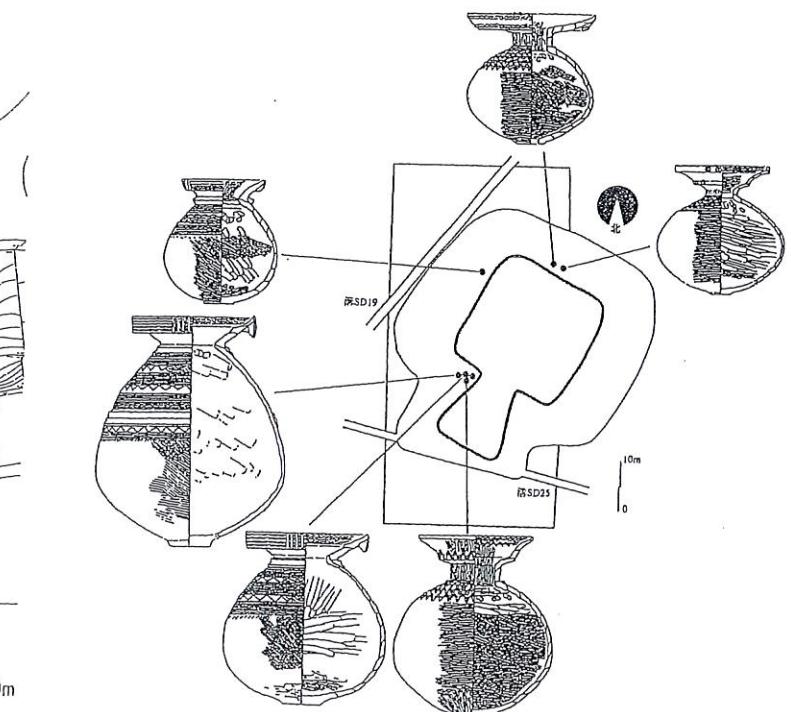
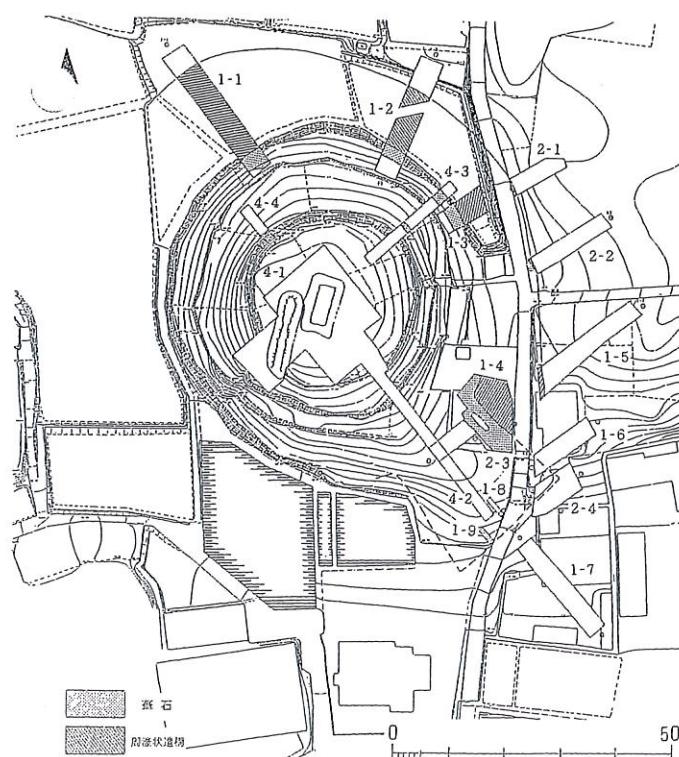
『三国志』魏志・東夷伝・弁辰条

国は鉄を出す。韓、滅、倭みな從いてこれを取る。諸々の市賈みな鉄を用ひ、中國が錢を用いるが如し。またもつて一二郡に供給す。

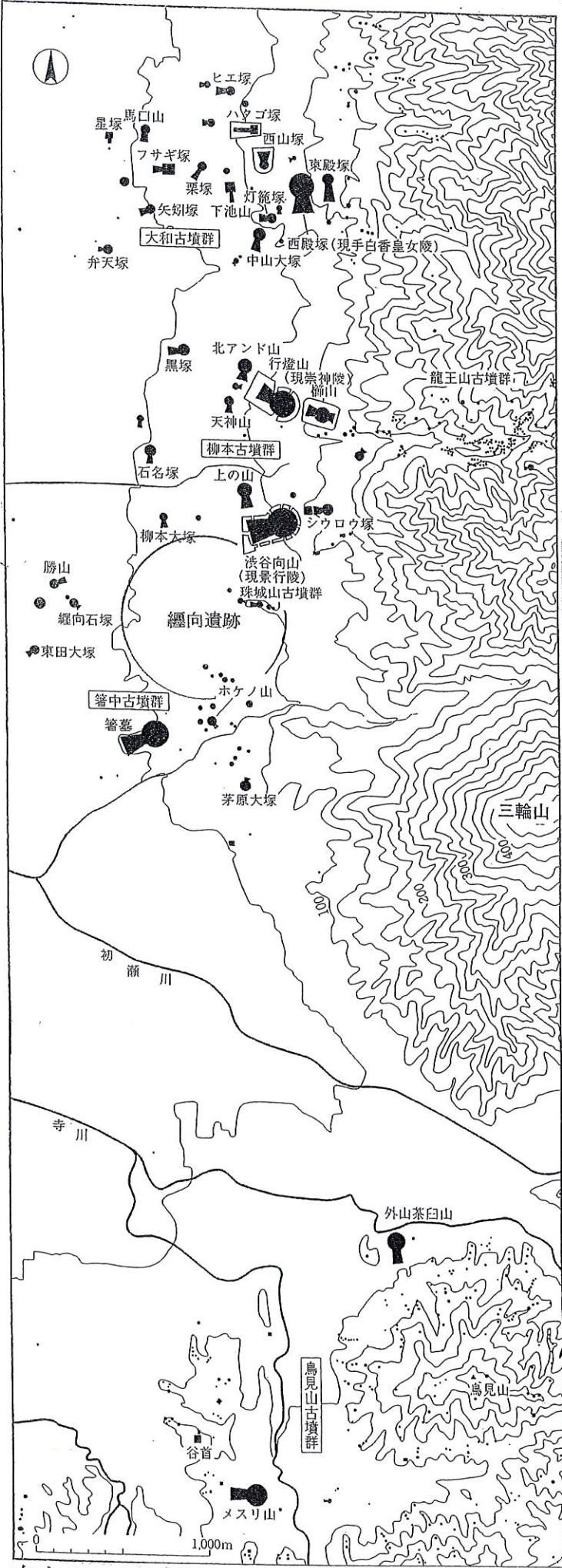
③ 邪馬台国連合から初期ヤマト政権へ



濃尾平野における古墳の編年（赤塚次郎氏による）



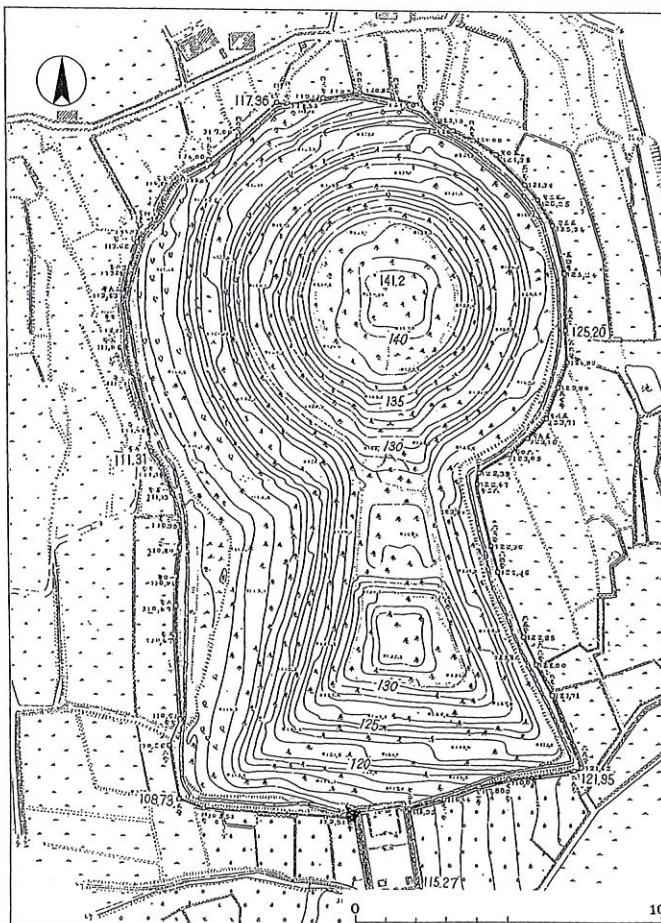
④ 王墓からみた初期ヤマト王権



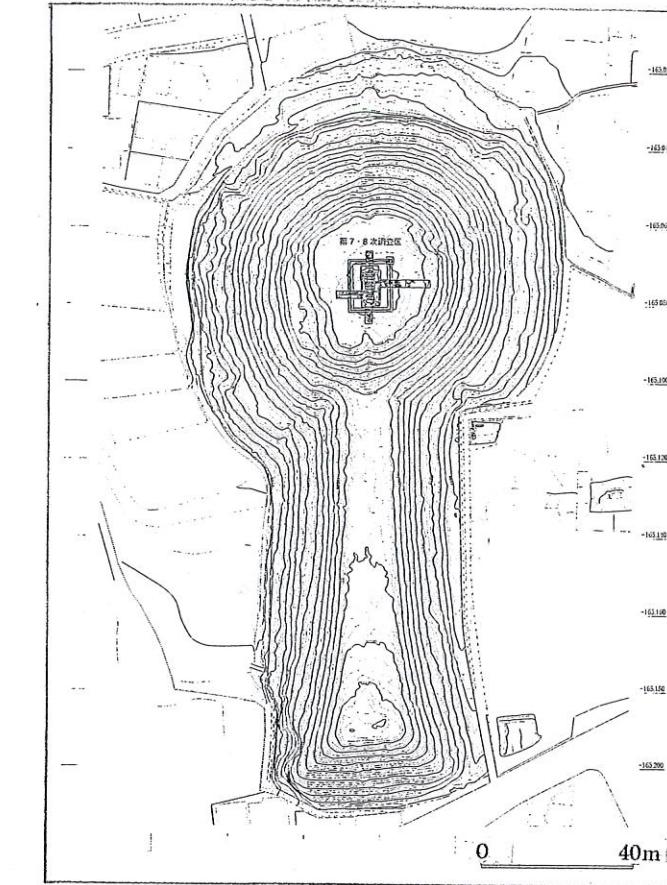
奈良盆地東南部における大型古墳の分布



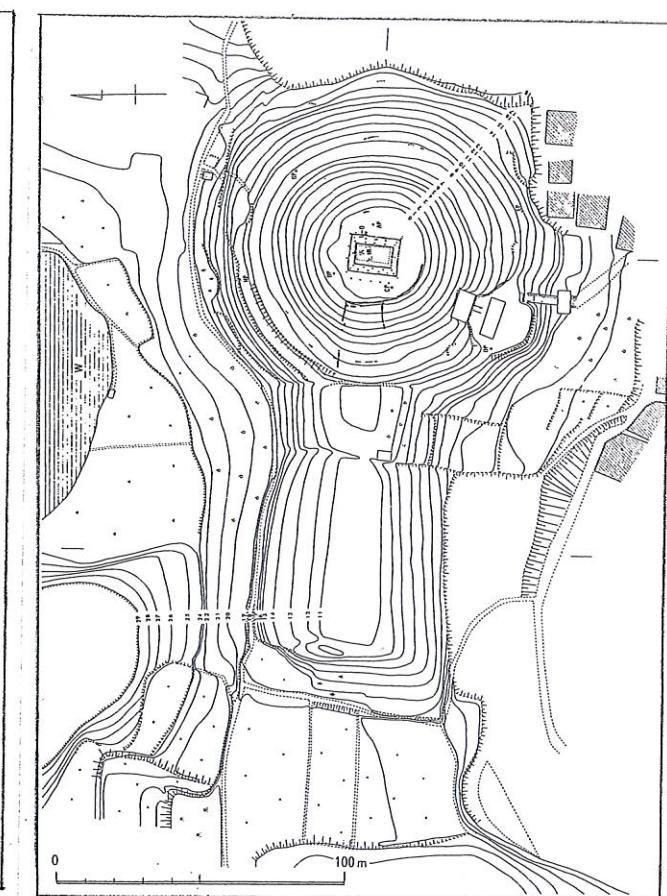
桜井市箸墓古墳



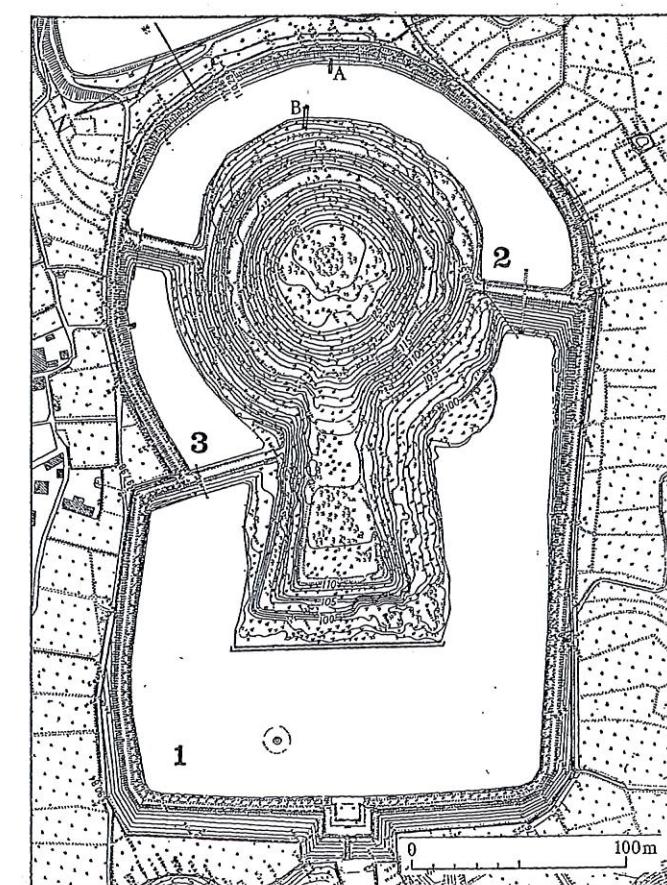
天理市西殿塚古墳（現手白香皇女陵）



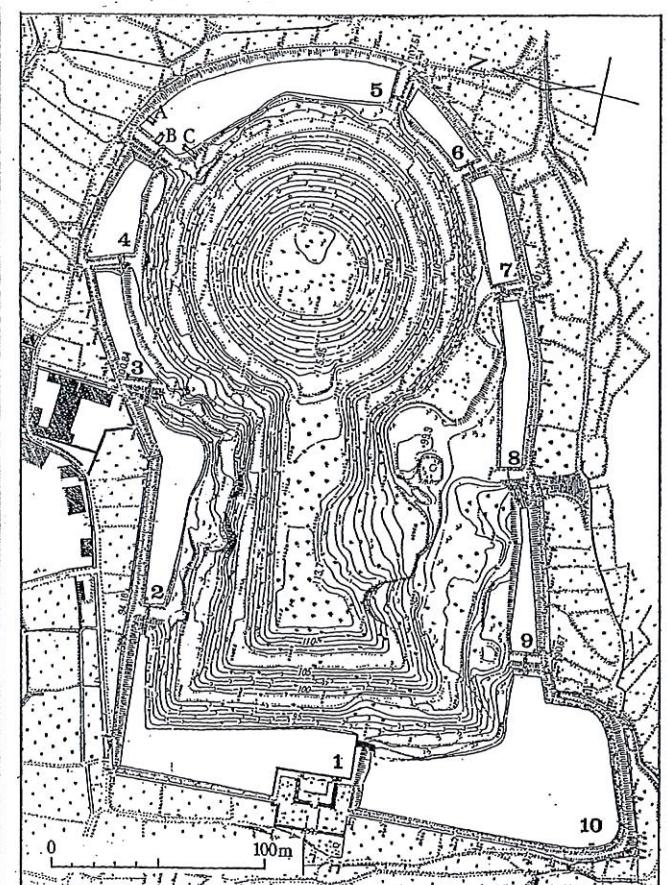
桜井市外山茶臼山古墳



桜井市メスリ山古墳

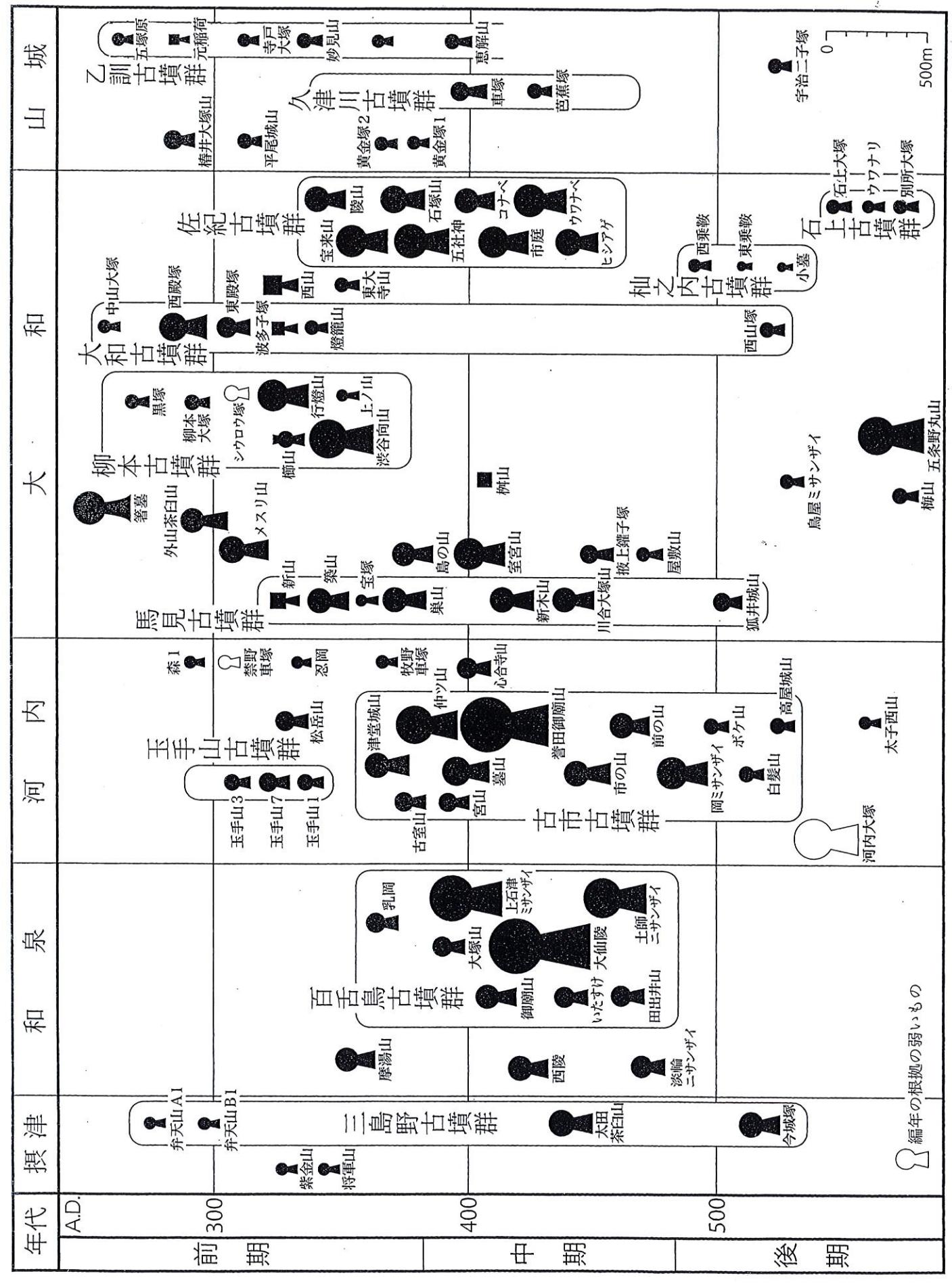
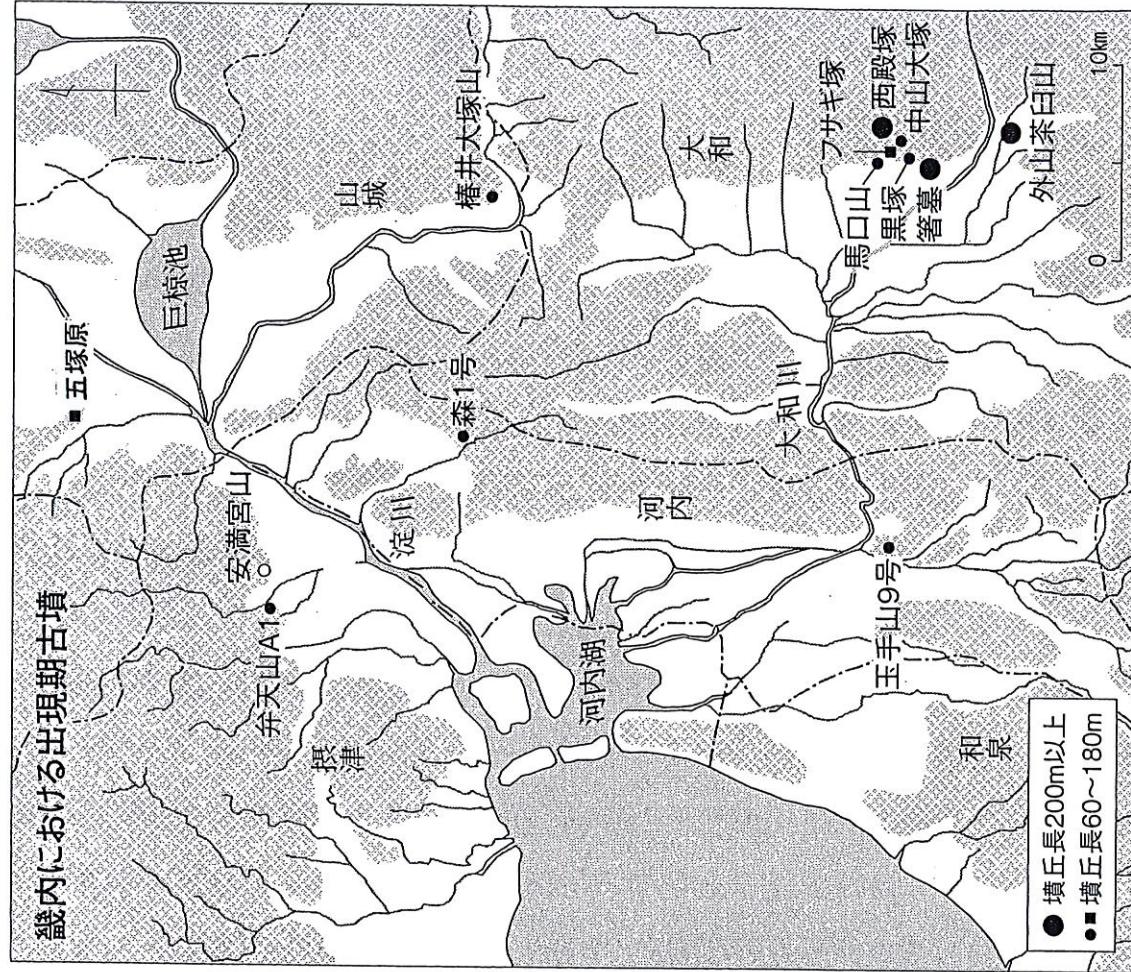
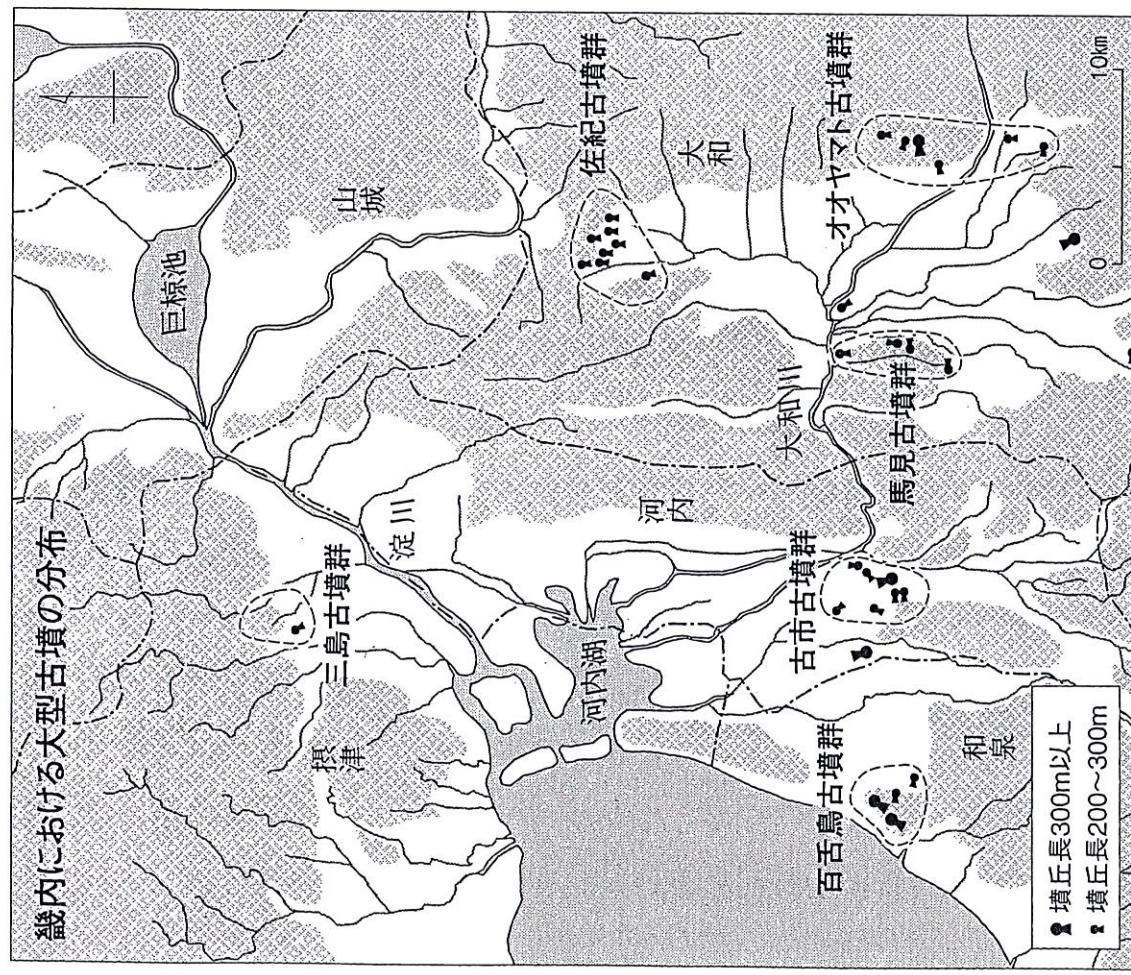


天理市行燈山古墳（現崇神陵）



天理市渋谷向山古墳（現景行陵）

⑤ ヤマト王権の地域的基盤



『魏書』東夷伝倭人条（魏志倭人伝）

——国名・人名・官名に付けた
振り仮名は仮のものである。

倭人は昔方の東南海の中に在り、山島に依りて國色を為す。旧は百余国、滅の時に朝見する者有り。今度訖滅する所三十国なり。

那須の御代り倭に至るには、海岸に循いて水行し、韓国を歴て、乍ち南し乍ち東す。其の北岸の狗
邪難國に到るには七千余里なり。

5 始めて一海を度ること千余里にして対馬國に至る。其の大官を牛狗とい、副を牛奴母離と曰う。居る所は絶島にして方四百余里可り。土地は山険にして深林多く、道路は禽鹿の徑の如し。千余戸有るも良田無く、漁物を食いて自活し、船に乗りて南北に市繩す。又南に一海を渡ること千余里、名づけて潮海と曰う、一文國に至る。官を亦牛狗とい、副を牛奴母離と曰う。方三百里可り。竹木・鬱林多く、三千許りの家有り。差田地有り、田を耕すも猶食うに

足らず、亦南北に市麗す。又一海を渡ること千余里にして末盧國に至る。四千余戸有り、山海に添いて居る。草木茂盛し行くに前人を見ず。好く魚鱉を捕え、水の深淺と無く皆沈没してこれを取り。東南に陸行すること五百里にして伊都國に到る。官を鄭支^{ニギ}と曰い、副を泄謨^{ヒツモ}・柄渠^{ハグニ}と曰う。万余戸有り。世主有るも皆女王國に統屬す。那使の往来に常に駐まる所なり。東南して奴國に至るには百里。竹を兜鷹^{カブトタガ}鰐^{カマクラ}と曰い、副を卑奴母離^{ヒヌモリ}と曰う。二万余戸有り。東行

15 東西して奴国に至るには百里。官を界思觸と曰い、副を卑奴母離と曰う。二万余戸有りして不弥国に至るには百里。官を多模と曰い、副を卑奴母離と曰う。千余家有り。南して投馬國に至るには水行二十日。官と弥弥と曰い、副を弥弥那利と曰う。五万余戸可りなり。南して邪馬台國(3)、女王の都那ガニする所に至るには、水行十日・陸行一月。官に伊文馬有り、次を弥馬升と曰い、次を弥馬獲文と曰い、次を奴佳提と曰う。七万余戸可りなり。女王國自り以北は、其の戸数・道里略載を得べきも、其の余の旁国は遺絶にして詳を得べからず。

20 次に斯馬國有り。次に已百支國⁽⁴⁾有り。次に所邪國有り。次に都支國⁽⁵⁾有り。次に弥奴有
り。次に好古都國有り。次に不呼國有り。次に姫奴國有り。次に對蘇國有り。次に蘇奴國有り。
次に巴邑國有り。次に韃奴蘇奴國有り。次に鬼國有り。次に烏晋國有り。次に鬼奴國有り。
次に那馬國有り。次に躬臣國有り。次に巴利國有り。次に支惟國有り。次に烏奴國有り。次に奴
國有り。此れ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴國有り。男子を王と稱す。其の官に狗
古智⁽⁶⁾有り。女王に屬す。

那自り女王国に至るには万二千余里なり。
男子は水小と無く皆黥面文身す。古自り以来、其の使い中国に詣るに、皆自ら大夫と称す。
夏后の少康の子会稽に封せられ、断髮・文身し以て蛟龍の害を除く。今倭の水人好く沈没して
魚鯨を捕え、文身し亦以て大魚・水禽を厭う。後稍以て飾りと為る。諸國の文身各異なり、
30 或は左に或は右に、或は大きく或は小さく、尊卑差有り。其の道里を計るに当に会稽の東治
6) の東に在るべし。

35 相^あ連^{れん}其^のの風俗^{ふうぞく}は淫^{いん}らな^らす。男子^{おとこ}は皆^{みな}露^{あらわ}し、木^き懸^{けん}を以^てて頭^{かぶ}を招^{まね}す。其^のの衣^きは横幅^{よこはば}、但^{ただし}結^{むす}して巡^{めぐ}ね、略^{りやく}縫^{ぬい}うこと無^なし。婦^{めん}人は被^はつ^らりし、衣^きを作^{つく}ること半^{はん}被^ひの如^くく、其^のの中央^{ちゅうじょう}を穿^うち頭^{かぶ}を^す。其^のに止^ときてこれを表^{あらわ}す。禾^こ稻^{とう}・新^{しん}豚^{ぶた}を和^{あわ}え、蚕^{さん}・蠶^{せき}・細^{ほそ}綿^{わた}・綿^{わた}・縣^{あさ}を出^だす。其^のの地^じに牛^{うし}・馬^ば・虎^{とら}・豹^{ひつじ}・羊^{ひつじ}・鷹^{たか}無^なし。兵^{ひょう}には矛^{ぼう}・楯^{たん}・木^き弓^{ゆみ}を用^{よう}う。木^き弓^{ゆみ}は下^{しも}を短^{たん}く上^{うわ}を長^{なが}くし、竹^{たけ}箭^のは或^もは鐵^{てつ}或^もは骨^こ鐵^{てつ}なり。有^るずする所^{ところ}は眞耳^{まみ}・朱崖^{しゆがい}と同^じせん。

僕の地は温暖にして、冬夏生菜を食い、皆徒跣なり。屋室有り、父母・兄弟臥息處を異にす。朱舟を以て其の身体を塗ること、中國の粉を用うるが如きなり。食飲には蓮豆を用いて手食す。其の死には棺行るも柳無く、土を封じて冢を作る。始め死するや併喪まで十余日、当40肉を食わず、喪主は哭泣し他人は就きて歌舞・飲酒す。已に葬れば家を擧げて水中に詣り澡浴し、以て禊祓の如くす。其の行來は、渡海して中國に詣るに、恒に一人をして、頭を梳らす、

45 燐甌を去らず、衣服を垢汚せしめ、肉を食わず、婦人を近づけず、吸人の如くせしむ。これを名づけて持疾^{じき}と為す。若し行く者吉善なれば共に其の生口・財物を願ゆ。若し疾病有り、暴害に遭わば、便ちこれを殺さんと欲す。謂えらく此の持疾^{じき}詛ますと。眞珠・青玉を出だす。其の山に丹有り。其の木に柏・桺・予桺・採櫻・投櫻アリ。烏鵲・鳩有り。其の竹は篠・竹・桃枝。薑・橘・椒・薑荷有るも以て滋味と為すを知らず。獮猴^{さる}・黑雉有り。其の俗、拳事・行來、云為する所行らば、帆^{ハタ}骨^{カニ}を灼^{ハサフ}いてトシ、以て吉凶を占う。先すトする所を告ぐ。其の辭は含

50. 善化の法の如く、火壇を観て兆を占う。其の会回には、坐起は父子・男女の別無く、人の性酒を嗜む。大人を見て敬む所は、但手を抑ち以て跪拜に當つ。其の人は寿考にして、或は百年或は八、九十乍なり。其の俗、國の大人は皆四、五姫、下戸も或は一二、三姫なるも、姫人は淫らならず、妬忌せず。盜竊せず、訴訟少なし。其の法を犯すや、怪き者は其の妻子を没し、重き者は其の門戸を没して宗族に及ぼす。尊卑各差序有りて相臣服するに足る。租賦を収むに専門有り。國に市有り、有無を交易し、木倭をしてこれを監せしむ。女王國自り以北には特に一大率を置きて檢察す。諸國これを畏懼す。常に伊都國に治し、國中に於て刺史の如き有り。

55. 王の遣使、京都・備方郡・諸韓國に詣り、及び那の倭國に佐いするや、皆津に臨みて搜鏻し、文書・賜物を伝送して女王に詔らしむに差錯するを得ず。下戸、大人と道路に相逢えば逡巡して草に入り、辞を伝え事を説くには、或は躊躇或は走り、両手は地に拵り、これが恭敬を為す。対応の声を噫と曰う。此するに然諾の如し。其の国、本亦男子を以て王と為す。佳まること七、八十年にして倭國乱れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為し、名づけて聖帝呼と曰う。聖道を事とし能く榮を懲わす。年已に長大なるも夫婦無く、男兒有りて國を治むを佐く。王と為りし自り以来、見ること有る者少なし。婢千人を以て自ら侍せしめ、唯男子一人有りて飲食を給し、辞を伝えて出入りす。居る處の宮室は樓觀・城柵を嚴かに設け、常に人有りて兵をして守衛す。

60. 女王国の東、海を渡ること千余里、復た国有り、皆倭の種なり。又侏儒国有りて其の南に在り、人の身は三、四尺。女王を去ること四千余里なり。又裸國・縣齒國有りて復た其の東南に在り、船行一年にして至る可し。

65. 参間するに、倭の地は海中洲島の上に絶在す。或は絶え或は遙なり、周旋すること五千余里可なり。

最初三年乙巳六月、倭の女王、大友難升米等を遣わして郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求めしむ。太守劉夏、吏を遣わし将い送りて京都に詣らしむ。其の年十二月、詔書して倭の女王に報いて曰わく、「親魏倭王卑弥呼に側詔す。帶方太守劉夏、使いを遣わし、汝の大夫難升米、次使都市牛利を送り、汝獻する所の男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈を奉じ以て到らしむ。汝の在る所蹕かに遠きも、乃ち使いを遣わして貢獻す。是れ汝の忠孝、我甚だ汝を私しむ。今汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬を仮す。裝封し帶方太守に付して仮授す。汝甚の種人を被拂し、廻ぬて孝順を為せ。汝の来難升米・牛利、遠きを涉り道路に勤勞す。今難升米を以て率普中郎将と為し、牛利を率普校尉と為し、銀印青綬を仮し、引見勞賜して遣わし退す。今絳地交花の錦五匹、絳地繡葉の願十張、絳絢縫五十匹、紺青五十匹を以て、汝獻する所の貢直に答う。又特に汝に紺地匂文の錦三匹、細班の華願五張、白絹五十匹、金八兩、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠(13)・鉛丹各五十斤を賜う。皆裝封し難升米・牛利に付す。還り到らば錄受し、悉く以て汝國中の人々に示し、國家汝を貢しむを知らしむべし。故に鄭重に汝に好き物を賜うなり」。正始元年、太守弓道、建忠の校尉が傳等を遣わし、詔書・印綬を奉じて倭国に詣り、倭王に拝仮し、并せて詔を附し金・帛・錦・扇・刀・鏡・杂物を賜わらしむ。倭王便に囚りて上表し、詔恩(14)を答謝す。

85 其の四年、倭王復た使い大夫伊萬者、拔邪狗等八人を遣わし、生口、倭錦、絹・青の綿、縣衣、帛布、丹、木猶の短弓、矢を上献す。拔邪狗等、營に率善中郎将の印綬を押す。

86 共の六年、詔して倭の難升米に黄幡を賜い、那に付して仮授せしむ。其の八年、太守王頤宣に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴國の刃王卑彌弓阿と共より和せず。倭の販斯烏越等を遣わして那に詣り、相攻撃する状を訛かしむ。難曾の掾史の張政等を遣わし、因りて詔書・黄幡を齎して難升米に押仮し、檄を為りてこれを告喰す。卑弥呼以て死す。大いに冢を作ること数百步、90 葬に徇する者奴婢百余人なり。更に男王を立てしも國中服さず。更に相謀殺し當時殺すもの千余人なり。復た卑弥呼の宗女の台与立、年十三なるを立てて王と為し、國中遂に定まる。政等、檄を以て台与を告喰す。台与、倭の大夫率善中郎将の拔邪狗等二十人を遣わし、政等の還るを送らしむ。因りて台に詣り、男女生口三十人を獻上し、白珠五千孔、青の大勾珠二枚、累文の難鏡二十匹を貢す。